

断夫山古墳の埴輪と須恵器

● 早野浩二

愛知県埋蔵文化財センターによる史跡 断夫山古墳の発掘調査に関連して、各機関が所蔵する埴輪と須恵器の資料調査を実施した。ここにその詳細を報告し、埴輪の構成、大型円筒埴輪の規格、装飾須恵器の器種構成などに新たな知見を追加した。

1. 資料調査の経緯

愛知県名古屋市熱田区に所在する史跡 断夫山古墳は、愛知県最大、全長 150m の前方後円墳である。古墳の築造時期は中期後半から後期前半と推測されている。

愛知県埋蔵文化財センターは令和 2 年度から同 4 年度に愛知県と名古屋市が共同で進める史跡 断夫山古墳整備事業に伴う発掘調査を実施し、同 5 年度には調査報告書を刊行した。他方、断夫山古墳の埴輪と須恵器は愛知県埋蔵文化財センター発掘調査出土資料以外にも、名古屋市教育委員会、南山大学人類学博物館などが所蔵する採集資料がある（川西 1978・1979、三渡 1983、南山大学人類学博物館 1984、名古屋市教育委員会 1985・1987、赤塚 1991、名古屋市博物館 1996、森・尾野 2003）。

発掘調査の調査報告書を作成する過程においては、採集資料を含めて古墳に関係する埴輪と須恵器の全体像を可能な限り把握することに努め、必要に応じて実測図を作成した。その一部は調査報告書に掲載したが、調査報告書としての性格上、実測図を掲載しなかった資料を含め、その詳細は割愛した。ここでは、古墳や個々の資料の重要性に鑑み、基礎資料として改めて提示し、古墳の評価に資することとする。

提示する採集資料としては、名古屋市博物館蔵資料、荒木集成館蔵資料、その他各所蔵機関資料に大別され、併せてすでに詳細が述べられている故田端勉氏採集資料（以下、田端資料）についても補足する。なお、田端資料は令和 6 年に名古屋市博物館に寄贈された。

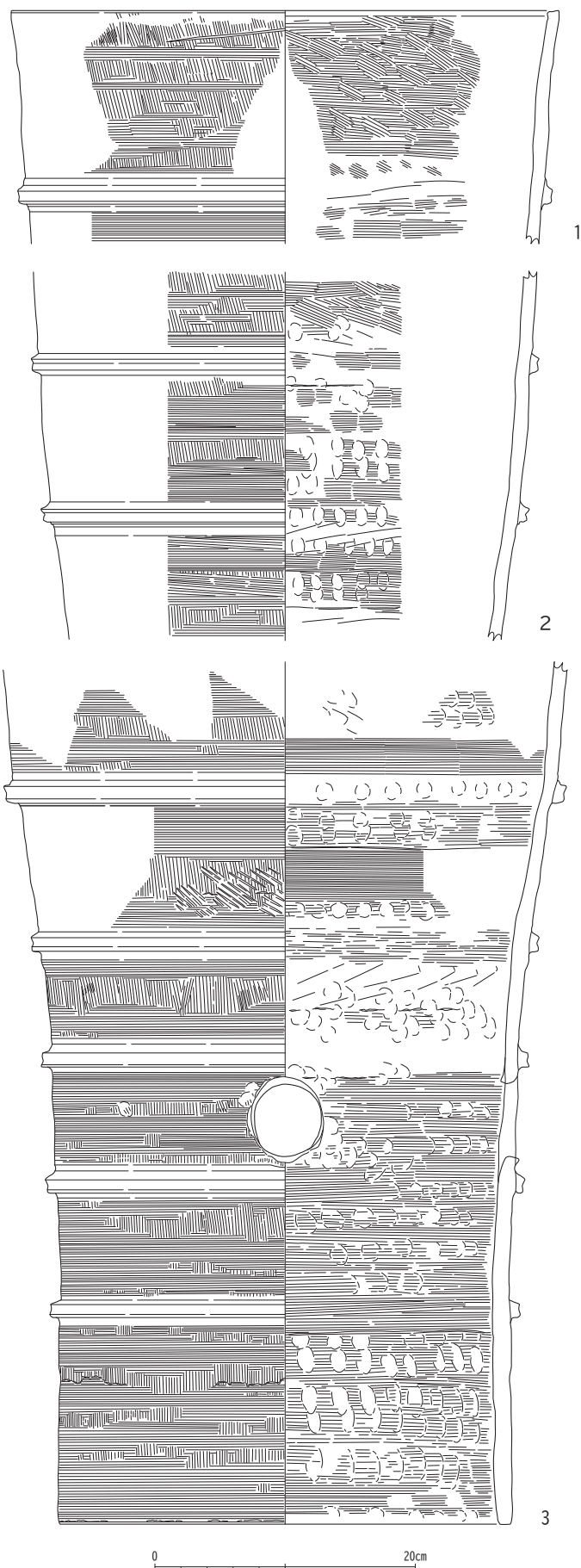
2. 名古屋市博物館

名古屋市博物館が収蔵する断夫山古墳の採集遺物として、守山郷土研究会、岡田恵喜、池田陸介、北村斌夫、小栗鉄次郎、飯尾恭之などの各氏、団体による収集品がある（名古屋市博物館 1996）。

守山郷土研究会旧蔵（図 1—1～3）

小片の埴輪、須恵器には「78.1.1 熱田 断夫山」の注記がある。旧蔵品は 5 突帯 6 段(66.4cm)以上の尾張型大型円筒埴輪 1 個体分(1～3)が多くを占める。これらについて、口縁部(1)、突帯間(3 段以上)が残存する体部(2)、基底部から 6 段目までが残存する大型円筒埴輪(3)を別個に図示した。口縁部(1)、体部(2)の復元径は残存する部位の歪みによって生じた誤差により、基底部から体部(3)の径とは対応しない。

口縁部(1)は外反しない形状で、端部付近の外面にはヘラ記号がある。口縁部高は 12.8cm である。体部(2)の突帯間隔は 11.5cm で、基底部から体部(3)の 5 段目の突帯間隔(11.6cm)とほぼ一致し、残存状況からしても、4 段目から 6 段目に対応する可能性は高いと思われるが、5 段目に観察される外面の叩きが認められないことからすると、別の(より上位の)段に対応する可能性もある。基底部から 6 段目までの体部(3)は、残存状況から 2 段目は透孔がなく、3 段目に 1 方向残存する透孔から、同段の対向する 2 方向に透孔が配されていた可能性が高い。内面に接合痕は認められないが、5・6 段目間の突帯付近に認められるわずかな



1~3. 守山郷土研究会

図1 名古屋市博物館蔵円筒埴輪（守山郷土研究会旧蔵）

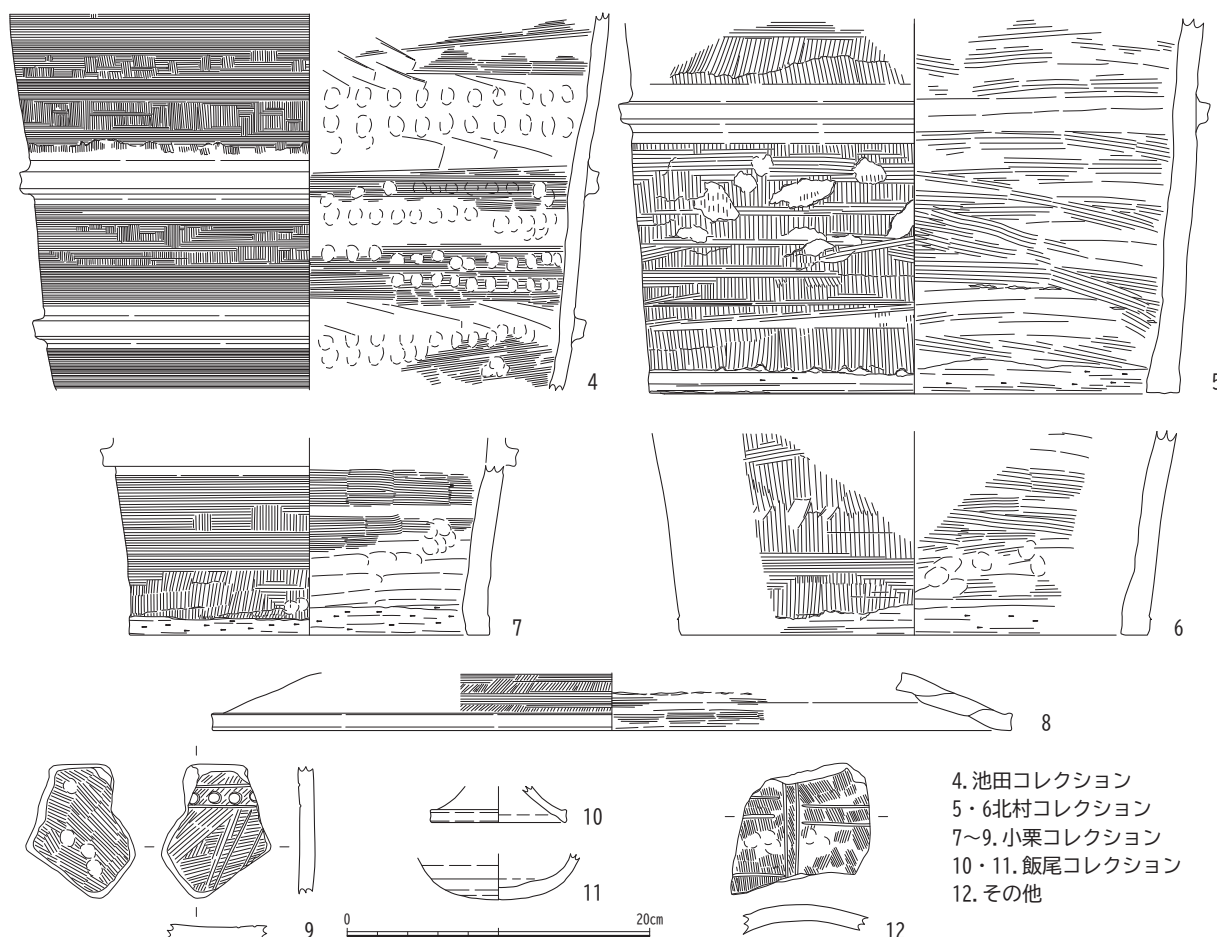


図2 名古屋市博物館蔵円筒埴輪・形象埴輪・須恵器（池田・北村・小栗・飯尾コレクションなど）

膨らみ、その下位に残る外面の叩きから、この高さ付近が倒立位置と推測される。基底部から5段分、55cm程度の高さで倒立したとすれば、10段前後、1m以上の高さが想定される。基底部高は17.2cm、2段目より上位の突帯間隔は9.9cm、9.8cm、8.7cm、11.6cmで、2段目から4段目は等間隔に近く、基底部は4段目のほぼ2倍の高さである。

池田陸介収集品（図2—4）

突帯間（3段以上）が残存する尾張型大型円筒埴輪の体部（4）を抽出し、図示した。須恵器と同様の焼成で大きく変形する。突帯間隔は10.3cmである。

北村斌夫収集品（図2—5・6）

基底部から2段目までが残存する尾張型大型円筒埴輪（5）、尾張型円筒埴輪の基底部（6）を抽出し、図示した。両者（5・6）ともかなり硬質に焼成され、底部に回転ケズリを施す。前者（5）の基底部高は19.7cmである。

小栗鉄次郎収集品（図2—7～9）

尾張型円筒埴輪の基底部（7）、蓋形埴輪（8）、

不明形象埴輪（9）を抽出し、図示した。尾張型円筒埴輪の基底部（7）は復元径から2突帯3段と推測される。北村斌夫収集品（5・6）と同様、かなり硬質に焼成され、底部に回転ケズリを施す。蓋形埴輪（8）は台部の笠部先端とした。笠部突帯は確認されない。内面に赤彩が残る。不明形象埴輪（9）として、わずかに反る曲面（凹面）を二本一組の沈線によって横方向と斜方向に区画し、横方向の沈線内に円形刺突を加えた土師質の破片（9）を図示した。味美二子山古墳で円形刺突は人物の服飾表現と馬の馬具表現に認められ、前者の可能性がより高いと思われるが、部位や表現は判然としない。飯尾恭之収集品（図2—10・11）

須恵器の脚部（11）と壺類の底部（12）を抽出し、図示した。器種、時期を詳細に示すことは難しい。

その他、不明形象埴輪（10）を図示した。湾曲する形状や施文が同じく味美二子山古墳の武人の大腿から膝付近の防具を表現したと思われる破片とも類似する。

【荒木集成館】

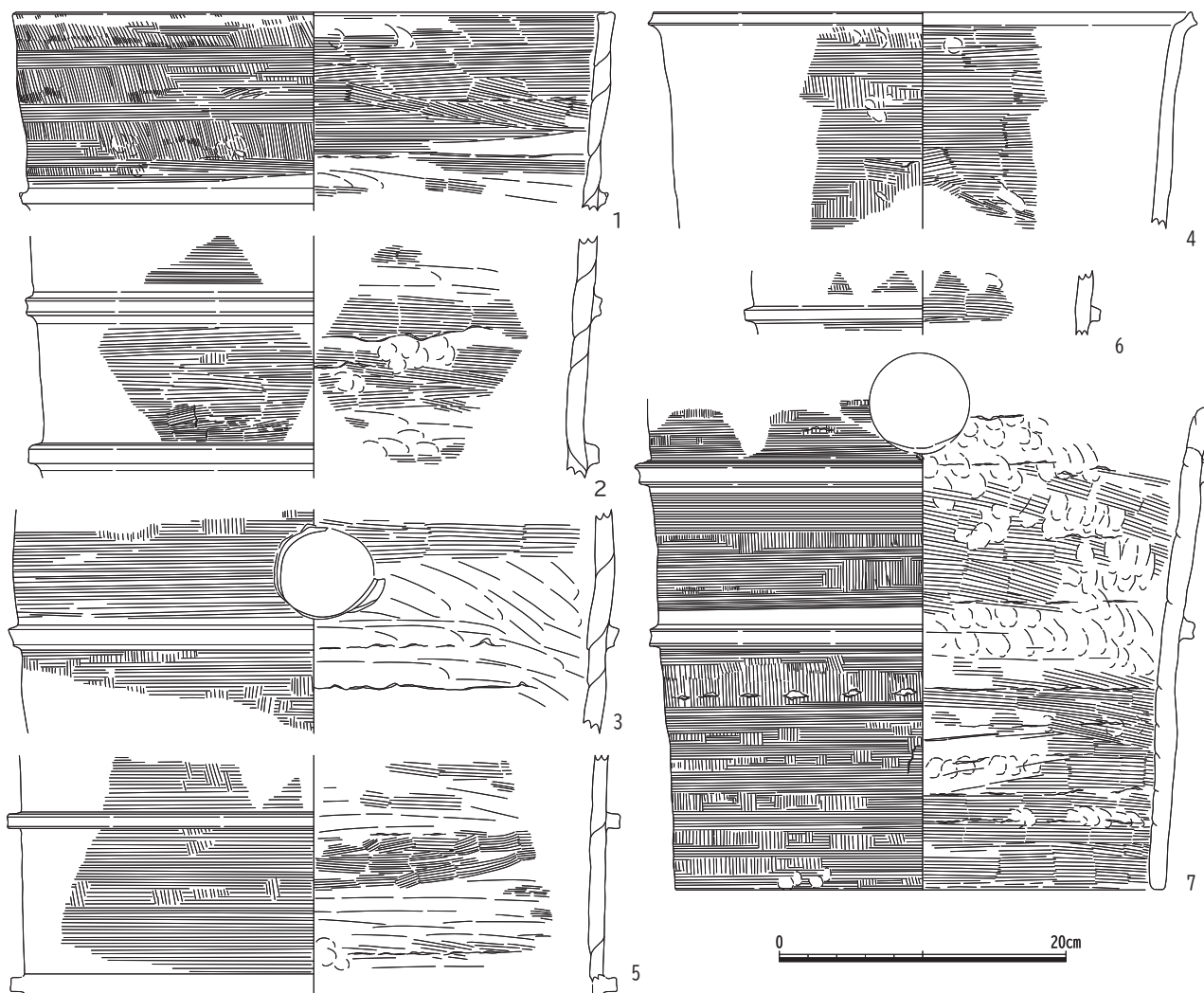


図3 荒木集成館蔵円筒埴輪

3. 荒木集成館

荒木集成館（図3—1～7）

採集の時期、経緯は不明である。尾張型円筒埴輪のみで確実な形象埴輪は確認されない。

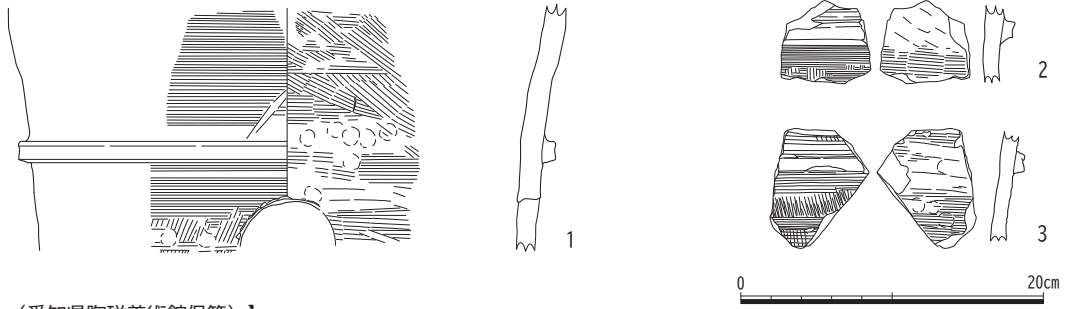
同一個体と思われる多数の大型円筒埴輪から口縁部（1）と突帯間（3段以上）が残存する体部（2）を抽出し、図示した。内外面に赤彩が残る（内面は斑状に赤色顔料が付着する）。口縁部（1）は（倒立後の）底部の可能性もある。体部（2）は上下で粘土紐積み上げの方向が異なることから、倒立技法が用いられていることが判明する。突帯間隔は10.5cmである。その他、透孔が残存する体部（3）、先端が外折する口縁

部（4）、突帯間隔（11.5cm）が判明する体部（5）、復元径から2突帯3段と推測される通有の円筒埴輪の突帯付近の体部（6）、基底部から3段以上が残存する大型円筒埴輪（7）を図示した。大型円筒埴輪（7）の基底部高は19.0cm、突帯間隔は10.8cmで、残存状況から2段目には透孔がないことが判明する。3段目には透孔が1方向残存する（対向する2方向に透孔が配されていた可能性が高い）。粘土紐積み上げの方向から倒立技法によることが判明する。

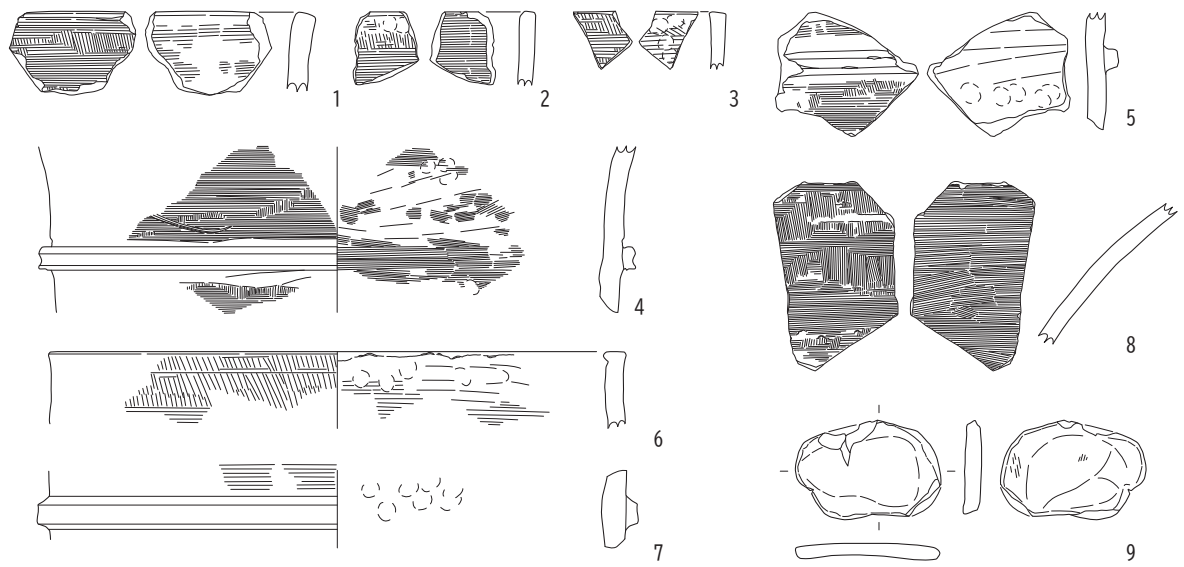
4. その他各所蔵機関

愛知県埋蔵文化財調査センター（図4—1～3）
愛知県埋蔵文化財センター調査時前後に採集

【愛知県埋蔵文化財調査センター】



【個人（愛知県陶磁美術館保管）】



【熱田神宮公園】

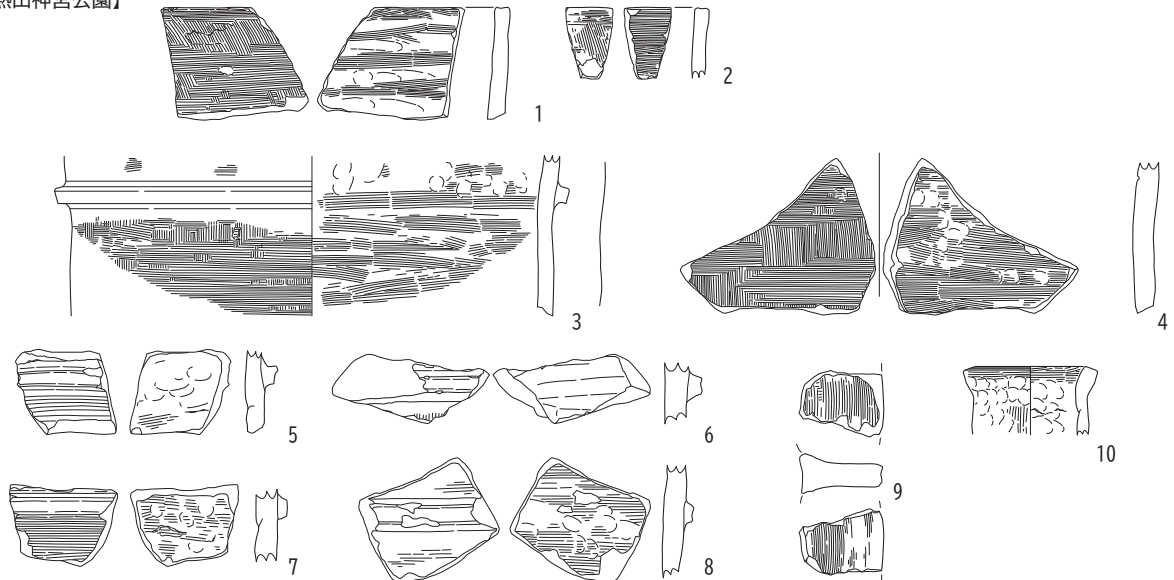


図4 各機関所蔵円筒埴輪（愛知県埋蔵文化財調査センター・個人・熱田神宮公園）

表1 埴輪一覧表

図番号	所蔵	注記など	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調	胎土	ハケ分類	備考
1 1	名古屋博物館	守山郷土研究会旧蔵	埴輪	円筒埴輪	42.2	-	-17.8	淡浅橙色	少	中	2,3同一 ヘラ記号
1 2	名古屋博物館	守山郷土研究会旧蔵	埴輪	円筒埴輪	-	-	-28.3	淡浅橙色	少	中	1,3同一
1 3	名古屋博物館	守山郷土研究会旧蔵	埴輪	円筒埴輪	-	35.0	-66.4	淡浅橙色	少	中	1,2同一 倒立 外面叩き
2 4	名古屋博物館	池田隆介コレクション 114-21 2-1	埴輪	円筒埴輪	-	-	-24.8	灰色	少	細	
2 5	名古屋博物館	北村斌夫コレクション	埴輪	円筒埴輪	-	34.8	-24.7	橙色	少	中	
2 6	名古屋博物館	北村斌夫コレクション 熱田断夫山古墳 ダンプ山 北村	埴輪	円筒埴輪	-	31.0	-13.5	灰色	少	中	
2 7	名古屋博物館	小栗鉄次郎コレクション 断夫山	埴輪	円筒埴輪	-	23.8	-11.2	橙色	少	中	
2 8	名古屋博物館	小栗鉄次郎コレクション 断夫山	埴輪	形象埴輪 蓋	53.0	-	-3.9	灰黄色	少	中	赤彩
2 9	名古屋博物館	小栗鉄次郎コレクション 断夫山南東登り口出土	埴輪	形象埴輪 人物?	長9.0	幅7.3	厚1.2	橙色	少	中	沈線、円形刺突
2 10	名古屋博物館	飯尾恭之コレクション	須恵器	高杯?	-	9.0	-2.4	灰色	少		
2 11	名古屋博物館	飯尾恭之コレクション	須恵器	壺類?	-	-	-3.1	灰色	少		
2 12	名古屋博物館	断夫山	埴輪	形象埴輪 人物?	長9.1	幅8.7	厚1.1	淡浅橙色	少	細	沈線
3 1	荒木集成館	収蔵庫	埴輪	円筒埴輪	42.0	-	-13.9	淡浅橙色	少	中	2同一? 赤彩
3 2	荒木集成館	収蔵庫	埴輪	円筒埴輪	-	-	-15.9	淡浅橙色	少	中	1同一? 赤彩 倒立
3 3	荒木集成館	収蔵庫	埴輪	円筒埴輪	-	-	-15.6	淡浅橙色	少	中	
3 4	荒木集成館	収蔵庫	埴輪	円筒埴輪	37.6	-	-15.1	赤灰色	少	中	
3 5	荒木集成館	収蔵庫	埴輪	円筒埴輪	-	-	-16.9	赤灰色	少	中	
3 6	荒木集成館	収蔵庫	埴輪	円筒埴輪	-	-	-4.5	淡浅橙色	少	中	
3 7	荒木集成館	展示	埴輪	円筒埴輪	-	34.2	-33.5	灰白色	少	中	倒立
4 1	愛知県埋蔵文化財調査センター		埴輪	円筒埴輪	-	-	-16.0	灰色	少	中	
4 2	愛知県埋蔵文化財調査センター		埴輪	円筒埴輪	-	-	-5.1	灰色	少	細	
4 3	愛知県埋蔵文化財調査センター		埴輪	円筒埴輪	-	-	-7.7	にぶい黄橙色	少	中	
4 1 個人	愛知県陶磁美術館保管		埴輪	円筒埴輪	-	-	-5.2	灰白色	少	中	2,3同一?
4 2 個人	愛知県陶磁美術館保管		埴輪	円筒埴輪	-	-	-4.8	灰白色	少	中	1,3同一?
4 3 個人	愛知県陶磁美術館保管		埴輪	円筒埴輪	-	-	-4.8	灰白色	少	中	1,2同一?
4 4 個人	愛知県陶磁美術館保管		埴輪	円筒埴輪	-	-	-7.6	淡浅橙色	少	細	ヘラ記号
4 5 個人	愛知県陶磁美術館保管		埴輪	円筒埴輪	-	-	-11.0	淡浅橙色	少	細	
4 6 個人	愛知県陶磁美術館保管		埴輪	円筒埴輪	38.0	-	-5.0	にぶい浅橙色	少	粗	7同一?
4 7 個人	愛知県陶磁美術館保管		埴輪	円筒埴輪	-	-	-5.1	にぶい浅橙色	少	粗	6同一?
4 8 個人	愛知県陶磁美術館保管		埴輪	朝顔形埴輪	-	-	-9.2	灰	少	細	
4 9 個人	愛知県陶磁美術館保管		土製品?	円筒埴輪	長9.5	幅6.6	厚1.1	橙色	少		
4 1 熱田神宮公園			埴輪	円筒埴輪	-	-	-7.4	灰白色	少	細	
4 2 熱田神宮公園			埴輪	円筒埴輪	-	-	-4.7	灰黄色	少	細	
4 3 熱田神宮公園			埴輪	円筒埴輪	-	-	-10.6	灰白色	少	細	
4 4 熱田神宮公園			埴輪	朝顔形埴輪	-	-	-10.0	灰白色	少	細	
4 5 熱田神宮公園			埴輪	朝顔形埴輪	-	-	-5.4	浅黄色	少	中	
4 6 熱田神宮公園			埴輪	円筒埴輪	-	-	-4.0	黄灰色	少	中	
4 7 熱田神宮公園			埴輪	円筒埴輪	-	-	-4.8	橙色	少	細	
4 8 熱田神宮公園			埴輪	円筒埴輪	-	-	-7.4	淡黄色	少	中	
4 9 熱田神宮公園			埴輪	壺形埴輪	-	-	-2.6	灰白色	少	細	
4 10 熱田神宮公園			埴輪	形象埴輪 蓋	7.2	-	-4.5	橙色	多	中	

した遺物で、発掘調査出土遺物と併せて愛知県埋蔵文化財調査センターで収蔵している。いずれも尾張型円筒埴輪で、突帯付近の体部(1～3)を図示した。

個人(愛知県陶磁美術館蔵保管)(図4—1～9)

柴垣勇夫氏が昭和50年代後半から60年代にかけて担当した名古屋文化財めぐりの際に前方部で採集したとされる資料である。採集日は昭和57年1月7日とも記され、昭和56年12月28日の新聞紙に包まれた状態で愛知県陶磁美術館に保管されている(他に八幡山古墳、守山瓢箪山古墳の採集遺物がある)。尾張型円筒埴輪の口縁部(1～3・6)、突帯付近の体部(4・5・7)、朝顔形埴輪(8)に加えて、不明土製品?(9)を抽出し、図示した。口縁部(6)と突帯付近の体部(7)は同一個体の可能性がある40点程

度の尾張型円筒埴輪から抽出し、図示した。不明土製品?(9)は注記がなく、断夫山古墳以外の採集遺物である可能性も考慮される。

熱田神宮公園(図4—1～10)

公園管理事務所による古墳の環境整備時に採集されたり、古墳の見学者が採集して事務所に寄託したと思われる遺物で、熱田神宮公園が保管している。尾張型円筒埴輪(1～8)、壺形埴輪(9)、蓋形埴輪(10)を抽出し、図示した。

尾張型円筒埴輪は口縁部(1・2)、突帯付近の体部(3・5～8)、体部(4)がある。短い錨状の突帯(9)は味美二子山古墳を参考にして、専用の円筒埴輪と組み合わせて用いる壺形埴輪(9)の基底部突帯とした。蓋(10)は台部軸受部の口縁部とした。口径(内径)7.2cmで、軸部径6cm程度と推測される発掘調査出土の立飾

の飾板受部とも法量が対応する。

味美二子山古墳は通有の朝顔形埴輪は確認されず、壺形埴輪とそれと組み合わせる専用の円筒埴輪がそれを代替していたことが判明している。断夫山古墳については、朝顔形埴輪と壺形埴輪を明確に峻別すること（通有の朝顔形埴輪の存否を確実に示すこと）は難しいが、20区周濠 015SD 下層出土の同一個体の可能性が高いとした「朝顔形埴輪」（5～12）に壺部と2突帯が残存する円筒部が含まれることからすると、通有の朝顔形埴輪と壺形埴輪が併存していた可能性がある。

5. 埴輪について

埴輪の構成

以下、円筒埴輪の構成、朝顔形埴輪と壺形埴輪の存在形態、形象埴輪を含めた機種構成についての現状を整理する。

発掘調査資料、各機関が所蔵する採集資料を通覧した場合においても、円筒埴輪は尾張型が大多数を占め、確実に他の系統に属する円筒埴輪はほぼ認められない。

通有の朝顔形埴輪に加えて、壺形埴輪（とそれと組み合わせる円筒埴輪）が併存していた可能性がある。

形象埴輪は採集資料を含めてもごく少ない。蓋が含まれ、家、人物が加わる可能性もあるが、

器種もごく限られる。

円筒埴輪は倒立技法による尾張型の大型円筒埴輪が多数を占めるが、底部ケズリを施した大小の円筒埴輪が含まれ、後者には倒立技法が確認されない。通有の2突帯3段の尾張型円筒埴輪が含まれる可能性も高いが、先述した壺形埴輪に組み合わせる円筒埴輪の可能性もある。

大型円筒埴輪の規格

すでに図示されている8突帯9段に復元される名古屋市資料、4突帯5段以上の南山大学資料と、今回提示した5突帯6段以上の守山資料（3）、2突帯3段目までが残存する荒木資料（7）、1突帯2段目までが残存する北村資料（5）の大型円筒埴輪を比較する（図5）。参考として、守山資料（3）と同じ5突帯6段以上の高蔵遺跡第7次調査の大型円筒埴輪（高蔵資料）も併せて比較する。

各資料は名古屋市資料を除くいずれの大型円筒埴輪も形態がよく類似し、特に基底部径は高蔵資料が35.6cm、守山資料（3）が35.0cm、南山資料が34.4cm、荒木資料が34.2cmで、 $35 \pm 1\text{cm}$ ($34.9 \pm 0.7\text{cm}$) と近似度が高い。名古屋市資料は基底部径を含めて図上で示された径は大きいですが、これは全体が楕円筒状に大きく歪んでいることに起因する。少なくとも大型円筒埴輪の基底部径については、倒立技法を採用しながらも、あるいは、その採用、非採用にかかわらず、35cm程度に揃えて大量に製作しようと

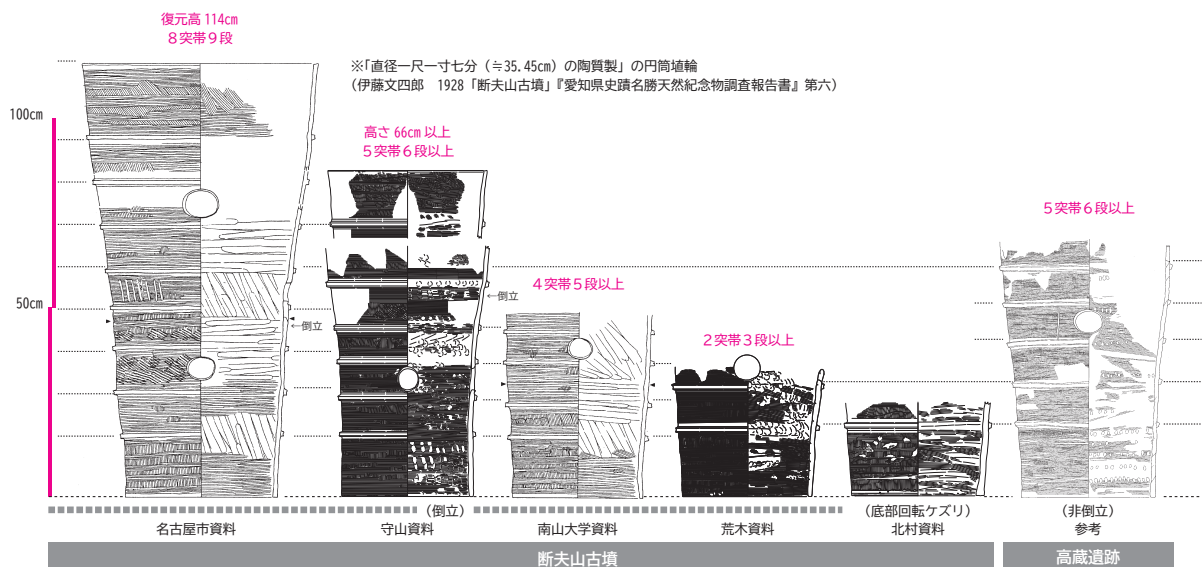


図5 大型円筒埴輪の比較

する一定の規格、意図が存在した可能性が高いことを推測させ 基底部高は名古屋市資料が17.2cm、守山資料(3)が17.2cm、南山資料が16.5cm、荒木資料が19.0cm、北村資料(5)が19.7cm、高蔵資料が20.0cmで、高蔵資料を除くと、 $18 \pm 1.5\text{cm}$ 程度と比較的近似する。口縁部高は名古屋市資料が19.0cmで基底部高に近似するが、守山資料(1)は12.8cmで基底部高より低い。突帯間隔は基底部高、口縁部高を上回ることではない。倒立位置を含む突体間は他の突帯間と比較して広く、倒立位置を含む突帯間を除く突帯間はほぼ均等に割り付けられる。

透孔は3段目、または4段目以上に対向する2方向に配され、その上位は1段分を空け、互い違いの2方向に配される。南山資料が4段目に配しているのは、倒立位置が3段目であることによるものであろう。高蔵資料が4段目に配しているのも、倒立技法を用いていないことと関連する可能性がある

その他、高蔵資料の各透孔には、(図上の)左に縦一文字状のヘラ記号がある。名古屋市資料の5段目の透孔の左にも類似したヘラ記号が認められる(ただし、数、使用工具は異なる)。

6. 須恵器について

田端資料の須恵器(図6—1～11)

断夫山古墳において採集された須恵器はごく限られるが、田端資料が知られている。田端資料の須恵器については、尾野善裕が猿投窯編年による時期比定を主眼とした理解を示しているが(森・尾野2003)、ここでは発掘調査の成果を踏まえ、古墳、葬送儀礼で使用される須恵器の器種構成を重視して再評価する。なお、図中の番号は尾野らによる番号を踏襲した。

尾野により東古渡町遺跡第1次調査SD03の甕に類似するとされた口縁部(3)は、豊田大塚古墳の中型の壺、天満社境内、長母寺の脚付三連壺(後述)などに類似し(図7)、特に後者は有段状の口縁部直下にまで波状文を施す点もよく類似する。同じく東山11号窯、西出古墳の大型甕に類似するとされた体部(4)は、短頸壺などの壺類とされた体部(5・6)、大型甕・短頸壺などとされた体部(7)と併せて短頸壺(な

どの壺類)が想定される。これらは法量が近似し、施文(刺突文)も類似するが、文様構成が異なることから明らかな別個体である。降灰の状況から5は有蓋、6は無蓋、または返りがある蓋を被せる有蓋の可能性が高い(4は不明)。なお、体部中位(7)には薄く剥離したような痕跡がある。

法量が近似する複数の短頸壺(脚付短頸壺)を含む器種構成としては、小幡茶臼山古墳が類似する。他に脚付短頸壺を含めた複数の短頸壺が確認される古墳として、東谷山1号墳、高蔵寺5号墳、白山神社古墳などが列挙され、後期古墳に特徴的な器種構成であることが理解される。あるいは師長町、寺西1号墳など、鳥鈕蓋の多くが法量、文様が類似する脚付短頸壺に伴うことも考慮する必要がある(図7)。

筒形器台とされた受部と脚部(8・9)は同一個体の可能性もある。ここでは、筒抜けの受部、22A区出土の脚付連結須恵器(脚付連結壺の可能性が高い)との類似から、同器種の可能性が高いと判断した。特に文様帯の幅、透窓の形状と配置、波状文の施文も類似する。あるいは同一個体の可能性もあるが接合しなかった。正確な径と傾きを判断することは難しいが、22A区出土の脚付連結須恵器を参考にして図示した。

これらは先述した長母寺、(伝)羽根古墳の脚付三連壺に類似する。あるいは壺の口縁部(3)、体部(4～7)は脚付連結壺である可能性もある(図7)。

体部に平行叩きが施された壺(11)は、頸部が直立気味であることに加えて、頸部のやや下位に重ね焼きによると思われる色調変化が認められることからすると、有蓋の短頸壺の可能性が高い。法量が類似する有蓋の短頸壺の例として、味美二子山古墳、甕塚古墳、大門大塚古墳の壺付蓋付脚付壺などがある(図7)。

須恵器の器種構成と葬送儀礼

脚付連結須恵器が出土した22A区(造り出しから南方向に10数m離れた位置に設定)で出土した壺類については、法量、文様等から脚付連結壺の壺部分として違和感がなく(別個体の可能性が高い)、味美二子山古墳、羽根古墳を参考に部位を推定し、器形の想定復元を示した。その際にも田端資料の須恵器についても、

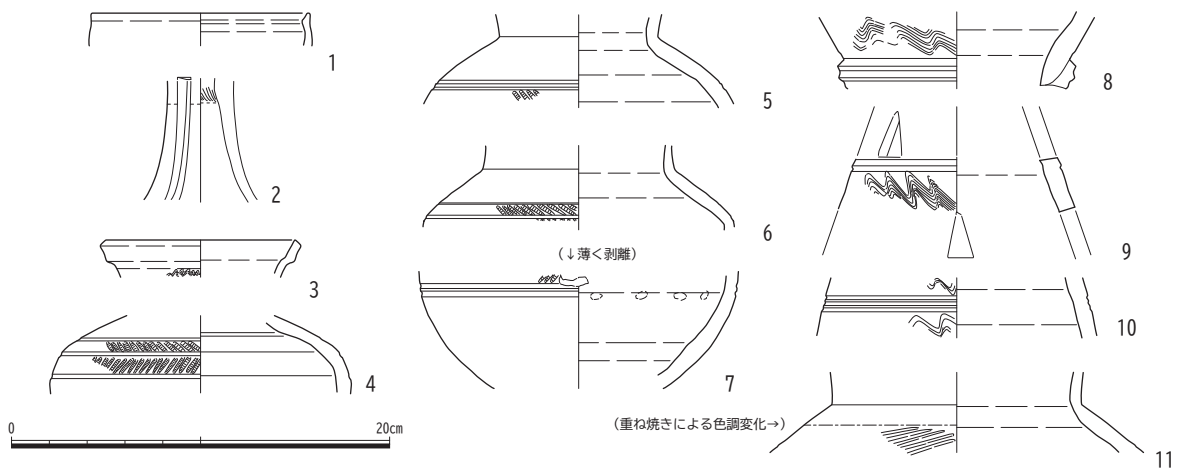


図6 故田端勉氏採集須恵器（森・尾野 2003 より作成）

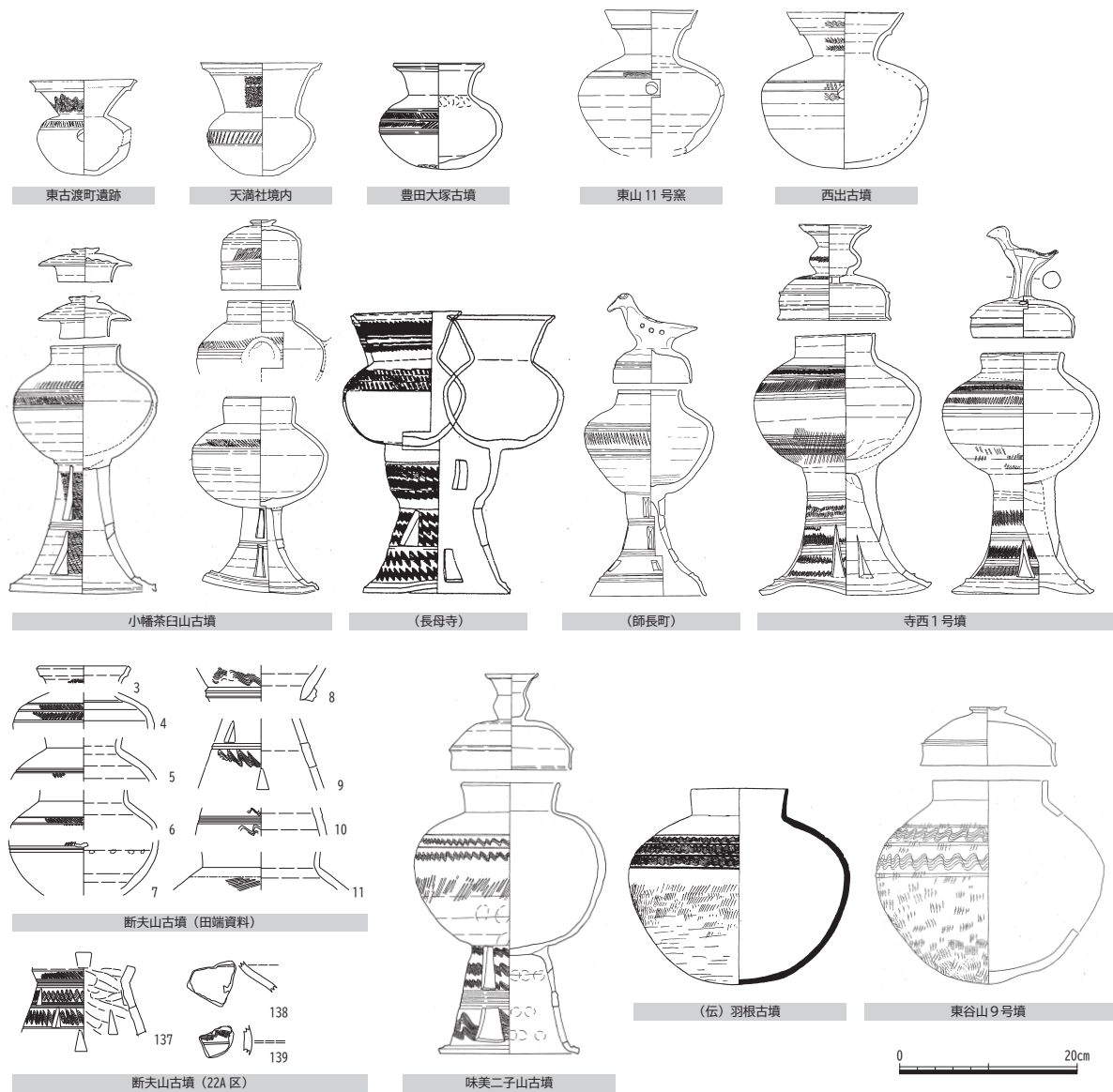


図7 須恵器の比較

脚付連結須恵器の脚部の可能性を示唆した。昭和初期、大場磐雄は造り出しで多数の須恵器「杯」、「子持高杯」の破片を採取したとされ（大場 1930）、これらは脚付連結須恵器の可能性も指摘されている（須恵器の所在は不明）。

以上を踏まえ、断夫山古墳の造り出し付近において、脚付連結須恵器を多数使用した儀礼が実施されたことを想定し、白鳥古墳が埋葬施設に2個体の脚付連結壺を含む多数の装飾須恵器を副葬していたことを含めて、古墳の性格、儀礼の内容を検討する必要性を提起した。

今回の補足により、多数の脚付連結須恵器を使用した儀礼の可能性とは別に、複数の（脚付）短頸壺で構成される可能性、鳥鈕蓋付須恵

器、壺付蓋付脚付壺が含まれる可能性をも提起した。後者の場合、後期古墳の様相とも類似することから、古墳の築造時期、葬送儀礼の系譜の問題にも派生する。

今回の資料調査に際して、下記の諸期間、諸氏からご高配を賜った。

愛知県陶磁美術館 熱田神宮公園 荒木集成館
春日井市教育委員会 名古屋市教育委員会
名古屋市博物館 南山大学人類学博物館
浅田博造 荒木正直 大西 遼 柴垣勇夫
鈴木文博 高橋佳子 富田航生 濱崎 健
森 泰通 山田暁

参考文献

赤塚次郎 1991「尾張型埴輪について」『池下古墳』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第24集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

大場磐雄 1930「断夫山古墳の造出について」『考古学雑誌』第20巻第1号 日本考古学会

川西宏幸 1978・79「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2・4号 日本考古学会

名古屋市教育委員会 1985『熱田区・白鳥古墳—法持寺改築に伴う発掘調査の概要—』

名古屋市教育委員会 1989『白鳥古墳第II次発掘調査報告書』名古屋市文化財調査報告21

名古屋市博物館 1996『名古屋市博物館館蔵品目録』第1分冊 総集・考古編

南山大学人類学博物館 1984『南山大学人類学博物館館報』第18号（柚木コレクション展）

三渡俊一郎 1983「名古屋市熱田白鳥・断夫山古墳の前後関係について」『古代学研究』99 古代学研究会

森 泰通・尾野善裕 2003「尾張断夫山古墳の時代—故田端勉氏採集資料をめぐる—」『三河考古』第16号 三河考古談話会

出典（調査報告書など）

[愛知県名古屋市千種区] 東山10号窯／愛知県 2015『愛知県史』別編 窯業1 古代 猿投系

[愛知県名古屋市中区] 東古渡町遺跡／名古屋市教育委員会 1989『東古渡町遺跡第一次発掘調査概要報告書』

[愛知県名古屋市瑞穂区] 師長町／瀬川貴文 2006「鳥形装飾付須恵器」『名古屋市博物館だより』第173号 名古屋市博物館

[愛知県名古屋市熱田区] 高蔵遺跡／名古屋市教育委員会 1995『石神遺跡 玉ノ井遺跡 高蔵遺跡（第7次）発掘調査報告書』

[愛知県名古屋市熱田区] 断夫山古墳／公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター 2024『史跡断夫山古墳』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第226集

[愛知県名古屋市守山区] 茶臼山古墳／名古屋市教育委員会 1990『茶臼山古墳発掘調査報告書』

[愛知県名古屋市守山区] 東谷山9号墳／名古屋市 2008『新修名古屋市史』資料編 考古1

[愛知県名古屋市守山区] 羽根古墳／守山市教育委員会 1963『守山の古墳』

[愛知県名古屋市東区] 長母寺／愛知県陶磁資料館 1995『古代の造形美 装飾須恵器展』

[愛知県豊橋市] 寺西1号墳／愛知大学文学部歴史地理学科 2023『豊橋市寺西1号墳の研究（1）報告編』

[愛知県春日井市] 味美二子山古墳／春日井市教育委員会 2004『味美二子山古墳』春日井市遺跡発掘調査報告第10集

[愛知県豊田市] 豊田大塚古墳／愛知県 2005『愛知県史』資料編3 考古3 古墳／豊田市 2015『新修豊田市史』19 資料編 考古II 弥生・古墳

[愛知県江南市] 天満社境内／江南市 2001『江南市史』本文編

[愛知県岩倉市] 西出古墳／岩倉市教育委員会 1983『岩倉南部土地区画整理事業地内所在埋蔵文化財発掘調査報告 御土井廃寺 西出古墳』